池上遺跡《古墳時代集落編》

ー川辺で暮らす人びとの生業ー

発掘現場から 文化力 POWER OF CULTURE

会期：令和8年10月5日（月）～令和9年3月26日（金）

会場：熊谷市立江南文化財センター ロビー

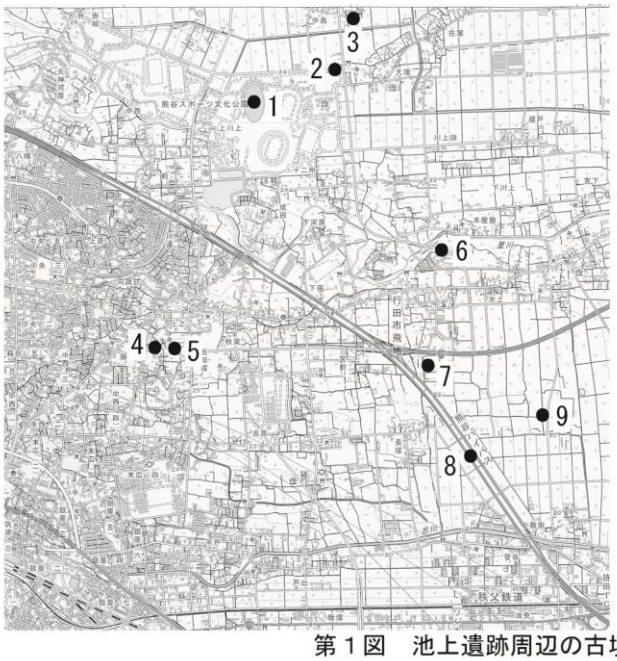
1　古墳時代のころの池上遺跡周辺（第１図）

池上遺跡の古墳時代の集落は、古墳時代前期（３世紀後半～４世紀）のものです。地形的には、荒川が形成した新期荒川扇状地と、古墳時代ごろまで利根川が流れていた妻沼低地との境界地域にあたり、湧き水や河川の水を利用する水田耕作に適していたため多くの集落が営まれていました。大規模な集落跡は、星川北側の北島遺跡や、南側の藤之宮・諏訪木遺跡などで見つかっており、北島遺跡では 157 軒の竪穴建物跡と集落を区画する方形環濠が検出されました。各集落で指導者を葬った墓（方形周溝墓）は造られましたが、この周辺で古墳時代前期の規模の大きな古墳は見つかっていません。

池上遺跡では、国道 17 号と国道 125 号が交わる上之交差点付近で、埋没した河川跡とその岸辺に営まれた集落跡を検出しました。周溝持建物跡19 軒、竪穴建物跡9 軒、掘立柱建物跡3 棟、方形周溝墓1 基、遺物集積８箇所、畠跡 1 箇所などで構成されており、北島遺跡、藤之宮遺跡、諏訪木遺跡とは違う次のような特色があります。

- 河川に間近な岸辺に建物を建てて集落を営んでいる。
- 集落内の建物は、「周溝持建物跡」が主体である。
- 遺物集積のうち、河川内に土器を据え置いた「土器集積」６箇所と、加工木材を据えた「木材集積」１箇所がある。

出土土器の特徴から古段階・中段階・新段階の３期に分けて捉えることができます。



1　北島遺跡　L=23.3m　a 156：b 1　方形周溝墓 27
　　方形環濠　パレス壺・特殊器台
2　田谷遺跡　L=23.0m　a 31：b 0　吉ケ谷式共伴
3　上中条中島遺跡　L=21.9m　a 5：b 0　小鍛治跡
4　藤之宮遺跡　L=24.1m　a 16：b 0
5　諏訪木遺跡　L=23.3m　a 12：b 1　方形周溝墓 2
6　古宮遺跡　L=21.0m　a 9：b 4
7　池上遺跡　L=20.8m　a 9：b 19　方形周溝墓 1
8　小敷田遺跡　L=20.0m　a 1：b 19
9　鶴巻遺跡　L=19.3m　a 0：b 3　方形周溝墓 1

L 遺構確認レベル
a 周溝を持たない竪穴建物跡数
b 周溝持建物跡数

0　200m
1:5000

第１図　池上遺跡周辺の古墳時代前期集落

２　集落の移り変わり（第２図）

◆古段階　弥生時代後期の特徴が残る土器を使用していた段階で、川べりに周溝持建物跡が等間隔で建てられました。E区の河川跡で見つかった「木材集積」では、舟の乗降に使われたと思われる加工された木材が見つかりました。

◆中段階　建物跡の数は減りますが、周溝内側の面積が全体の中で最大規模のＦ区第２号周溝持建物跡(FSR02)が建てられました。また、E区第１号方形周溝墓(ESZ01)が、古段階のE区第１号周溝持建物跡(ESR01)に重ねて造られました。この場所には周溝持建物跡がないことから、ここは特別な場所だったようです。

◆新段階　新しい特徴を持つ土器を使用していた段階で、周溝持建物跡と周溝のない竪穴建物跡が混在する２つのグループがE・Ｆ区とＩ区に分かれます。河川跡は堆積が進んで浅くなり、E区河川跡では、多数の土器を据え置いた「土器集積」が４箇所形成されました。何らかの祭祀行為の痕跡と考えられます。



第２図　池上遺跡古墳時代前期集落の変遷

３　周溝持建物跡が主体の集落（第３図）

○周溝持建物跡とは？

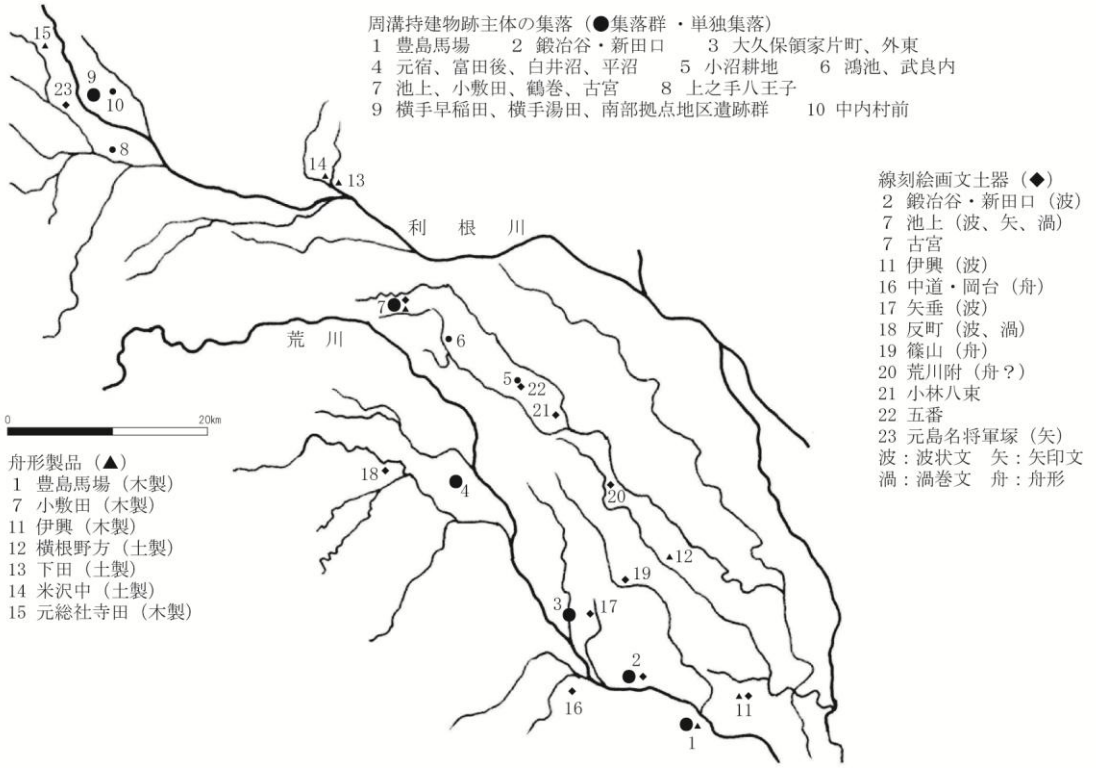
竪穴建物跡の周囲に溝（周溝）を巡らせている構造のものです。周溝は全周はせずに一部が途切れていて、ここが内外の通路と考えられます。また、周溝から河川に向けて溝が延びるものもあり、建物周囲の排水を目的としていると言えます。竪穴建物跡は通常のものよりも掘り込みが浅く 20 ㎝程度で、掘り込みの痕跡が不明瞭で柱穴だけが認められるものもあります。

周溝持建物跡を主体とする集落は、これまで戸田市鍛冶谷・新田口遺跡、川島町富田後遺跡、加須市小沼耕地遺跡などでも検出されていますが、いずれも古墳時代前期のもので、低地帯の河川に近い自然堤防上に営まれた集落です。

○周溝持建物跡が主体の集落と周溝持建物跡がない集落

周溝持建物跡イコール低地の住居と考えられていますが、第１図を見ると同じ低地帯で同じ古墳時代前期の集落なのに、池上・小敷田・鶴巻などのように周溝持建物跡(b)が主体の集落と、北島・藤之宮・諏訪木などのように通常の竪穴建物跡(a)が主体で周溝持建物跡(b)はほとんどない集落があります。この違いは何なのでしょうか？

各遺跡で建物跡を検出した標高(L)を比較してみると、周溝持建物跡が主体の集落の方が、周溝持建物跡がない集落よりも約 3～4m低いことが分かります。周溝持建物跡主体の集落の人びとは、標高が低く河川氾濫の被害を受けやすくても敢えて川辺であることを選んだと考えられます。周溝持建物跡の構造もこの環境に合わせたものでしょう。そうまでしてこの場所に住んだ理由は、河川にかかわる仕事、舟を使った物資輸送「舟運」を生業にしていたということが考えられます。これに対して、周溝持建物跡がない集落は、農業に従事し、輸送の恩恵を受けていたと思われます。



第３図　周溝持建物跡主体の集落と関連遺物の分布図

４　舟運のつながり

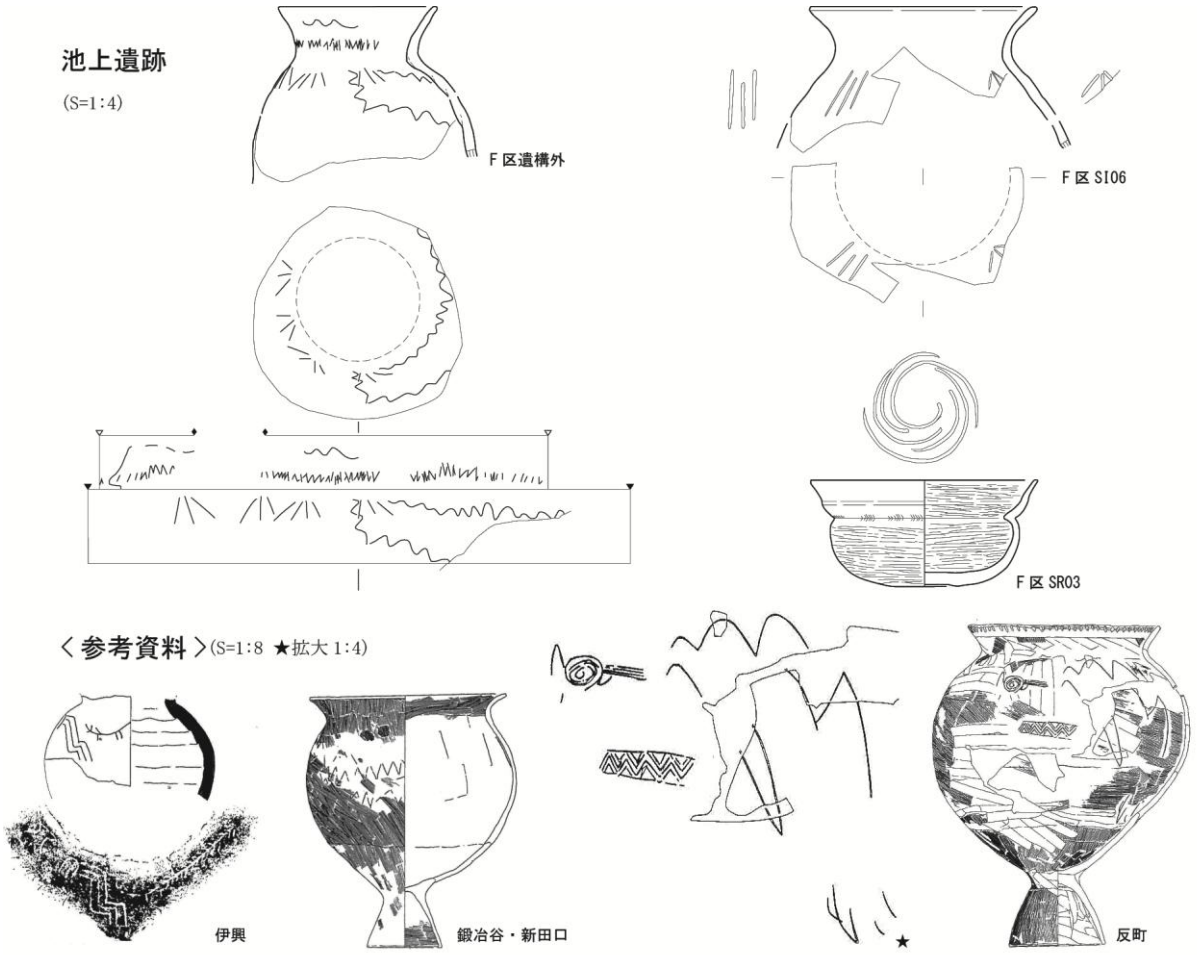
○舟にかかわる遺物

池上遺跡に隣接する小敷田遺跡でも川沿いの周溝持建物跡の集落が見つかっていますが、ここでは実際の準構造船の部材やミニチュアの舟形木製品という舟（船）にかかわる遺物が出土しています。舟形木製品は、東京都足立区伊興遺跡、北区豊島馬場遺跡、群馬県前橋市元総社寺田遺跡でも見つかっています。

○線刻絵画文土器（第４図）

もうひとつ注目されるのが、池上遺跡で出土した線刻絵画文土器です。横方向に描かれた波状線が特徴的ですが、これと似た波状線が描かれた土器が、伊興遺跡、戸田市鍛冶谷・新田口遺跡、東松山市反町遺跡などで出土しています。

舟形木製品や線刻絵画文土器が出土したのは、いずれも川沿いの古墳時代前期の集落で、豊島馬場遺跡、鍛冶谷・新田口遺跡、伊興遺跡は周溝持建物跡主体の集落です。第３図にあるように周溝持建物跡主体の集落や、舟形木製品および線刻絵画文土器が出土した集落は分布が重なって、当時の利根川やそれに合流していた荒川の流路に沿って連なっています。これらは「舟運」を生業にする人びとの共通要素と見られ、東京都北区・足立区～熊谷市～群馬県前橋市・高崎市が「舟運」を通じてつながっていたと考えられます。



第４図　線刻絵画文土器

令和８年１０月５日発行
編集・発行：熊谷市教育委員会 社会教育課 文化財保護係（熊谷市立江南文化財センター）